

Title	非漢字圏日本語学習者に対する漢字熟語の教育と漢字の情報処理 : 読解における未習熟語の意味推測と熟語の構成漢字の認知過程をめぐって
Author(s)	Palamà, Francesca
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59143
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	パラマ フランチェスカ Palamà Francesca
博士の専攻分野の名称	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	第 24874 号
学位授与年月日	平成23年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学位論文名	非漢字圏日本語学習者に対する漢字熟語の教育と漢字の情報処理－読解における未習熟語の意味推測と熟語の構成漢字の認知過程をめぐって－
論文審査委員	(主査) 日本語日本文化教育センター教授 奥西 峻介 (副査) 日本語日本文化教育センター教授 山蔭 昭子 教授 鈴木 睦 世界言語研究センター教授 真嶋 潤子 日本語日本文化教育センター准教授 莊司 育子

論文内容の要旨

外国語としての日本語の教育分野において、未習の漢字熟語の意味推測は、テキスト理解を促進させるのに有効なストラテジーであるが、非漢字圏日本語学習者にとっては困難であることが指摘されている（森 2004ほか）。さらに、文字の情報処理に関する研究（邱 2002aほか）においては表音文字と表音文字の認知方法が異なることが明らかにされている。これらのことから、非漢字圏日本語学習者にとって漢字熟語の意味推測が困難であるのは、母語の表記に使われる表音文字（アルファベットなど）の認知方法が日本語の漢字の処理に転移しているためではないかと推察し、本研究の主題を設定した。

本研究では、(1)日本語学習者による漢字熟語の情報処理過程においてどのような問題が生じるか、(2)その情報処理過程が母語の文字処理方法とどのように関係しているか、という研究課題について、2つの調査を通じて調べた。2008年10月から2009年2月の期間に行った本調査1では、漢字の情報貯蔵方法を考慮しながら、日本語学習者による熟語の情報処理に関する現象にはどのようなものが見られるかについて観察をした。これに引き続き、本調査1で観察された熟語の情報処理に関する問題は、母語の表記の認知方法から影響を受けたものであるか否かを明らかにするために、2010年12月から2011年2月の期間に本調査2を行った。

本調査1は、読解の訓練とともに未習熟語の意味推測の訓練が行われる中級の日本語読解の授業において実施した。授業に参加した13人の学習者を対象に、読解に用いたテキストに出現する漢字熟語の意味をどのように処理するかについてインタビューによってデータを収集した。その際に、熟語の形態素分析における問題、そして構成漢字について貯蔵された情報と漢字の情報貯蔵方法について調べた。そして、未習熟語の意味推測を行う際に、学習者がどのような誤りをするのか、あるいはしないようになるのかについても調べた。被験者にとって既習漢字で構成された未習熟語の意味推測を行わせ、意味推測に成功した場合と失敗した場合を観察した。

その結果、既習熟語の場合も未習熟語の場合もいずれにおいても、熟語の構成漢字について意味情報が正しく貯蔵されるケースが見られたが、構成漢字について既習であると被験者が判断したにもかかわらず、漢字についての意味情報が貯蔵されていないという現象も見られた。意味情報が貯蔵されていない場合の漢字の情報貯蔵方法については、被験者から提供された情報をまとめた結果、漢字を

熟語の構成漢字として学習しているケースが多いことが分かった。たとえば、未習語の「予定」を意味分析した際に、「予」についての意味情報が貯蔵されていないというケースが観察された。この被験者によると、「予」の情報貯蔵方法について、「予約」の構成漢字としてのみ情報貯蔵したとのことであった。つまり、構成漢字の意味情報が貯蔵されていない原因としては、熟語に対して形態素分析を行っていないことが考えられる。意味情報が貯蔵されていないこのような漢字で構成される未習熟語に出会った場合、特に意味推測が困難であった（この例について述べると、「予」について意味情報を貯蔵していなかった被験者たちは「予定」の熟語の意味推測に失敗している）。さらに、授業では意味推測の訓練が行われていたにもかかわらず、意味推測は調査の最後まで困難なままであった。このことから、漢字の正しい意味情報が貯蔵されていないという問題は漢字を学習する段階で生じていると考えられ、意味推測の訓練などにより意味推測の方法に慣れてきたとしても、前提となるべき漢字について貯蔵されている情報自体が不十分であれば意味推測は不可能であると考えられる。この点について、漢字熟語の意味推測における失敗は、漢字の学習方法に関係があると推測されるが、本調査1のデータは被験者の口述したものにもとづいているため、漢字の学習方法まで確かめることができなかった。ゆえに、漢字の学習から熟語の意味推測までのプロセスを観察することによって、上記の推測を確かめることを目的として本調査2を行った。また漢字の意味情報の貯蔵における問題は、母語の表記の認知方法と漢字の認知方法が異なるにもかかわらず、学習者が母語の認知方法を利用してしまふことに起因すると考えられたため、本調査2では文字の情報処理過程が母語の文字処理方法といかに関係しているかについても調べた。

本調査2は、イタリア語母語話者27人と日本語母語話者10人を対象に行った。被験者の母語としてイタリア語と日本語を選んだ理由は、これらの両言語が正書法深度による分類の中で正反対に位置することから、母語の表記の処理方法を調べるために相応しい言語であると考えられるためである。音韻情報、意味情報と形態情報を持ち、一つの文字が複数の形態素を表記するという日本語の漢字と同じ特徴を持つ人工の文字（以下、テスト文字）を利用し、その文字により構成される複合語（以下、熟語）の意味推測過程を観察した。さらにそこから、母語の表記の認知方法と漢字の意味情報貯蔵の条件（すなわち、熟語の構成漢字として情報貯蔵されたのか、あるいは1つの形態素からなる単語の表記として情報貯蔵されたのか）が、未習熟語の意味推測に及ぼす影響を検討した。

まず、日本語母語話者とイタリア語母語話者の被験者のデータを比較することによって以下の結果が得られた。日本語母語話者の被験者の方がより正しく意味推測することができ、イタリア語母語話者の被験者と統計的に有意な差が見られた。構成文字の情報貯蔵に関しては、イタリア語母語話者の被験者よりも日本語母語話者の被験者の方が熟語の構成文字の意味を正しく情報貯蔵していることが分かった。テスト文字は、日本語の漢字と同様に、書記素と音韻素との規則性が低い「深い正書法」として分類できる文字であり、かつ、意味情報を持つ文字である。しかしイタリア語母語話者の場合、この文字を情報処理する際に、意味情報を持たない母語の文字（アルファベット文字）の認知方法がテスト文字の処理にも転移したと考えられる。さらに、イタリア語母語話者の被験者を、日本語の学習経験がある被験者（14人）と全く経験のない被験者（13人）の2グループに分けて結果を比較してみたが、グループの間に有意な差は見られなかった。ゆえに当調査においては、日本語の学習経験の有無は文字の認知過程に影響を及ぼさないと考えられる。その一方で、日本語の学習経験のある被験者のグループのうち、上級レベルの学習者の方がより高い正答率を残したという点から、日本語のレベルが上がるにつれてイタリア語母語話者も日本語母語話者の認知方法に近づいていく傾向があることも窺われた。しかし、上級レベルの被験者の中にも正答率の低い被験者もいたことから、高い学習レベルに達していても文字の認知過程に問題が存在する場合もあることが分かった。

次に、文字の情報貯蔵の条件と未習熟語の意味推測の関係について検討した。文字を1つの形態素からなる単語の表記として情報貯蔵すると、その文字の意味情報は正しく貯蔵され、未習熟語の構成文字として遭遇した場合も、その熟語の意味を正しく推測できるという傾向が見られた。その一方で、文字が熟語の構成文字としてのみ紹介された場合は、熟語の意味を覚えていても、構成文字の意味に関する情報は貯蔵されないという傾向が見られた。この現象の原因は熟語に対する形態素意識が低いことにあると考えられる。そのような文字が未習熟語の構成文字になった場合には、熟語の意味推測が不可能であった。この結果は本調査1を裏づけるものであり、本調査1において観察された学習者の熟語の形態素意識の不十分さという現象は、本調査2でも観察された。

これらの結果を通じ、非漢字圏日本語学習者が熟語の意味情報を正しく処理できるようにするために

は、漢字の表語性と漢字熟語の構成漢字の役割について指導を行うことにより、学習者の形態素意識を高める必要があることを明らかにすることができた。

論文審査の結果の要旨

日本語教育の課題の中で、常に問題にされるのは、日本語の正書法の教育、とりわけ人口に膾炙するのは漢字の問題である。当該論文は、この問題の一部、しかしながら、きわめて重要な項目を扱ったものである。

漢字は、一般に、西欧諸言語におけるアルファベットが通常、言葉の音形式を表示するのに対して、言葉の意味を表示すると見なされ、「表語文字」と呼ばれたりするが、現代の言語生活において、その表語性が明白であるのは、日本語の場合に限る。中国語などにおいても漢字は使用されるが、通常、ある表記に対応する語形式が一つであるから、厳密に表語文字か（あるいは表音文字か）は断定しがたい。いつぼう、日本語においては、ある表記に対応する語形式が一つと限らないことが多く、複数ある語形式が所謂類義語ないし同義語であるので、その表記は言葉に音形式よりも意味内容を示しているとも見なしうるのである。たとえば、「年月」という表記は「としつき」と「ねんげつ」のいずれかを表している。

そもそも、漢字は、どれを文字単位と見なすにせよ、アルファベットなどに比して、明らかに数が多く、かつ、現行の日本語においては、その知識を欠いて理解できる書写語がほとんど存在しないので、日本語学習者にとっては、その習得は困難ながらも必須の課題となっている。故に、その教育ないし学習における困難の軽減は日本語教育における重要な課題である。

この課題を克服するために、さまざまな試案、試行がなされてきたが、それらの多くが成功を収めるには程遠いものであった。その原因の一つが、言語の表記法についての理解不足があったことは否めない。そのような状況において、当該論文は文字表記のシステムに十分な検討を加えた結果、上記の漢字の表語性を積極的に活用する方法に着目した。すなわち、日本語における漢字を、その特性に注目して、アルファベットなどの文字を教育する場合は異なった観点で教育するのである。

現代の日本語においては、語彙の大半が、いわゆる漢字複合語すなわち複数の漢字の組み合わせで表記される語であり、そこに漢字の表語性が維持されておれば、その語彙の大半を語（形態素）の複合と認知でき、かつ、各漢字の意味内容の結合と理解できるから、仮に未知の語彙であっても、ある程度、語彙が推量でき、その推量が語彙習得に資し、また、日本語読解力の向上に繋がるという仮説に基づき、個別の漢字を形態素を表記するものとして教育する方法である。当該論文は、それが単なる仮説でなく、実際に成功を収めることの検証に成功した希有な研究である。

その検証にあたって、論者は、まったく新しい実験方法を考案した。すなわち、意味内容と複数の音形式を表すとする架空の記号（複数）を措定し、それを被験者（イタリア人および日本人）に学習させることによって、架空言語の語彙の習得を、主として、次の4点について実験した。（1）イタリア人と日本人の間に、形態素記号の複合の理解度に差があるか否か。（2）日本語既習者と未習者の間に差があるかどうか。（3）上記の教育方法による訓練によって、理解度が向上するかどうか。（4）各記号個別の教育は理解度に影響するかどうか。

実験結果の詳細な検証の結果、漢字教育において、個別の漢字の意味内容を教育し、その組み合わせによる未知語彙の意味理解の訓練を行えば、日本語書写語の読解力においてきわめて顕著な教育成果が得られること、また、この分野においてもいわゆる母語の干渉はあるが、訓練によって容易に解消されることを証明した。

その立論は、広範にして詳細な先行研究の検討ときわめて明晰な論理に裏打ちされた前例のない実験計画と実験の厳密な実施ならびにその結果の緻密な分析からなっている。その研究成果は日本語教育に寄与するところは非常に大きい。また、より広く深い課題に発展する研究で、将来、人間の視覚記号の認知システムの解明に重要な前進をもたらす可能性さえもっていると思われ、学術的に高く評価でき、博士の学位を授与するに足ると判定できる。

なお、本研究の成果の一部は、タイ・チュラロンコン大学の国際学会ほか、日本語教育学会などで発表され、広く注目を集めたとともに、高く評価された。